

歌手の山川豊さんが闘う肺がんステージ 4

分子標的・抗体薬使用で 5 年生存率 4 倍向上

肺がんが増えています。とくに高齢者と女性で増えています。85 歳だった俳優の勝呂誉さんが今年 1 月に肺がんで亡くなりました。歌手の山川豊さん (67) は 2023 年 10 月、ステージ 4 の肺がんと診断され、現在も抗がん剤治療を続けながら活動をされています。

肺がんの診断と治療は近年大きく変わりました。20 年前は診断時、すでに転移のあるステージ 4 の肺がんの 5 年生存率は 5% 前後でした。しかし、国立がん研究センターのデータによると、最近では 25% ほどと大いに改善しています。

■ 診断時にステージ 4 が 5 割

76 歳の女性 A さんは生来健康でたばこは吸いません。8 年前の秋、左の鎖骨近くに硬い腫瘍 (しゅりゅう) があるのに気づき、開業医を受診し、胸部 CT でステージ 4 の肺がん疑いといわれました。総合病院の呼吸器内科で気管支鏡検査などを受け、「肺腺 (せん) がん」と診断されました。肺がん用の遺伝子パネル検査で EGFR 遺伝子に変異を認めました。EGFR 変異肺がんの効果のある分子標的薬「ゲフィチニブ」を内服すると 1 カ月ほどで腫瘍は著明に縮小しました。

しかし、治療約 2 年で腹部の転移が増大しました。採血で遺伝子検査 (リキッドバイオプシー) をするとこの薬に対する耐性変異が見つかり、「オシメルチニブ」という分子標的薬に変更しました。腫瘍は再び縮小し、現在も治療を受けながら元気に過ごしています。

肺がんは日本人のがんでは 2 番目に多く、死亡数では 1 位です。肺がんは、がん細胞の形態から大きく、腺がん▽扁平 (へんぺい) 上皮がん▽大細胞がん▽小細胞がんに分けられます。腺がんがいちばん多く肺がん全体の半数以上を占め、現在も増加しています。

肺がん診療の課題の一つに、診断時にステージ 4 と診断される人が約 5 割といちばん多いことです。肺がんの主な症状はせきや血痰 (けったん)、胸痛などですが、がん特有ではありません。とくに腺がんは、早期では症状がほとんどなく、進行して初めて症状が出るので、ステージ 4 での発見が多くなります。早期に肺がんを見つけるには、胸部レントゲンや低線量 CT など肺がん検診が欠かせません。

ステージ 4 の肺がん治療の主体は抗がん剤です。まず、がん遺伝子検査をして変異があれば、それに対応する分子標的薬を使用します。肺がんの 4 割、腺がんでは 6 割ほどに EGFR 変異のような分子標的治療が可能な遺伝子変異が見つかります。

もし標的になる遺伝子変異が見つからなければ、「ニボルマブ」などの免疫チェックポイント阻害薬を含む治療を行います。この場合、がん細胞での PD-L1 というタンパク質の発現量を見て、免疫チェックポイント阻害薬を単独、あるいは複数の薬を組み合わせで治療します。

ステージ 4 の肺がんの予後が大きく改善した理由は、これら分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が使えるようになったからです。これらの薬は、適正に使えば従来の抗がん剤よりも有効で長く効きます。特有の副作用があるものの、多くの副作用は軽く、治療を受けながら日常生活も可能です。また高齢者でも、少し体力の落ちた人でも、脳転移があっても状態が良ければ治療は可能です。

最近では画期的な効果が期待できる治療薬「抗体薬物複合体」が使えるようになり、さらに「二重特異性抗体」という治療薬も開発されています。ステージ 4 の肺がんの予後は今後も改善するでしょう。